

BOOK REVIEW 1

福祉工学への招待：ヒトの潜在能力を生かすモノづくり

伊福部 達 著

ミネルヴァ書房 ISBN 978-4623071197 2014年8月10日発行

評者：梶本裕之（電気通信大学）

バーチャルリアリティ学会前会長の伊福部達先生の新著である。著者の業績は聴覚障害者のための聴触覚変換，視覚障害者のための視触覚変換，気配の研究，など福祉工学全域にわたる。

本書の冒頭で著者は次のように述べている。「私は（中略）最初から福祉工学を標榜していたのではなく，周りの人達に私の専門は福祉工学であると命名されたという方が正しいと言えます」。これは著者こそその言であり，本書を特徴づけていると言える。すなわち本書は自伝的物語を面白く読んでいるといつの間にか福祉工学に入門してしまっていたという，福祉工学の創始者だからこそできる仕掛けになっている。紹介されている研究の一つ一つが，著者自身や研究室メンバ，その周辺の物語を内包しており，一研究室の自叙伝としても愉快である。舞台が北大で動物が度々登場することもあり，「動物のお医者さん」を読んでいるような気になってくる。

本書の一貫したテーマは福祉工学の研究アプローチである。音の高さの急激な変化に対する知覚の研究は有名な緊急地震速報チャイムの選定につながり，麻雀の盲牌の研究は触覚による感覚代行につながり，九官鳥やインコなどの研究は人工咽頭の改良につながるというように，「福祉工学の基礎を身近なサイエンスに求め，その結果を福祉機器の開発に生かすという研究アプローチ」を繰り返し鮮やかに描いている。個々の謎解きで感じられるワクワク感は，ラマチャンドランの「脳のなかの幽霊」にも通じる推理小説の趣がある。

著者の研究アプローチの特徴がサイエンス（知覚に潜む潜在能力の発見）とエンジニアリング（障害という問題解決）のループの徹底にあることは上述のように力説されているが，読み進むうちにそれだけではないことが分かってくる。すなわち強烈な多方面への好奇心という原動力があって初めて成立す

るということである。ろう管（円筒状のろうに音の振動を刻んだ昔の記録媒体）の音の再生など，福祉工学とは一見関係のなさそうなエピソードも本書に配置されれば違和感がないのは，著者の強い好奇心に読者が慣らされていくためと思われる。

あとがきで著者は，文系の読者も想定して福祉工学の入り口を広げる本としたと述べている。あえてそれに付け加えるなら，本書は幅広い年齢層，キャリア段階に読者を得る本であると言える。今からVRないし福祉工学の研究室の門戸を叩こうという学生はもとより，留学前の学生であれば著者がスタンフォードに留学した際の話に勇気づけられ，また研究者であれば研究内容はもとより研究室運営や，本書後半で紹介されている現在進行形の高齢者支援プロジェクトに特に興味を惹かれるだろう。

最後に極めて個人的な，誤読を含むおそれのある感想を述べておきたい。評者は，錯覚現象の発見や解明を端緒とした研究を幾つか行っている。それらは応用目的からはスタートせず，錯覚の発見から研究をスタートし，「いつの間にか」応用に結びつく（かもしれない）という

ものである。この「いつの間にか」が曲者であり，応用に結びつく可能性の高い「筋の良い」錯覚は，応用先をすぐに思いつくものではなく，結局「十分面白い」錯覚であるとしか言えないのではと感じている。しかも十分面白い錯覚であっても，何年たってもまだ応用が見つからないものも多い。

評者は本書を読んだ時，この「十分面白い現象」と「いつの間にか役に立つ」の関係の難しさを，僭越ながら著者も共有しているように感じられた。つまり九官鳥や盲牌の研究は，やはり「十分面白いから」始めたように思われ，それが鑑定眼の確かさから応用に結実した，ように感じられた。この意味で特に本書は評者にとって勇気づけられるものであった。

